

今日は晩唐の詩人杜牧の「清明」と、盛唐の詩人王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る」を学びました。

平明な杜牧の詩は、江戸時代以来日本でも愛誦され、「江南の春」「山行」は特に有名。詩吟でもよく歌われます。そんな杜牧の詩の中で、この「清明」という作品はとても有名かつ得体の知れない詩なのだそうです。

日本で最も愛誦された『唐詩選』はおろか、今も中国で愛誦されている『唐詩三百首』、更に5万首近くもの唐詩を網羅した『全唐詩』にも入っておらず、杜牧の詩文を集めた『樊川文集』にも収録されていません。唯一、宋代に編纂された『千家詩』にのみ杜牧の作として納められているのだそうです。これが広く読まれたお陰で今では多くの人が杜牧の作と信じて疑いません。しかし本当に杜牧が作った詩なのかどうか分からない、ちょっと謎めいた詩です。清明というのは二十四節気の一つで、日本でもよく知られています。中国では清明節と呼ばれ、お墓詣りをして先祖を偲ぶ日でもあります。

清明節は4月5日前後(今年の場合は4日)。この頃はピクニックやお花見に良い時期ですが、あいにく雨の多い時期でもあります。日本では菜種梅雨とも呼ばれますね。

この詩は、お墓詣り、或いは行楽に出たものの、突然の雨に降られて、道行く人は右往左往。こうなりゃ酒でもくらってやろう、と酒屋はどこか、と尋ねたら、牧童があっちの杏の花の咲いている所だよ、と答えたという内容です。これは有難い、でもかなり遠そうだな、と思ったのかどうか。軽くふざけて書いた様にみえて、ピシッと作詩の法則に合っていて、現代中国語でも読み易く、今日の発音練習も参加者一同の呼吸がピタリと合ってスムーズにいきました。

ところが内容も一見平易に感じられる一方で、よく味わってみると作者自身が雨に遇ってアタフタしたのか、そういう人達を目の当たりにして書

いたのか分からないし、また二行目の「路上の行人魂を断たんと欲す」という言葉は雨が降ったくらいで大袈裟ではないだろうか、と考えさせられます。「断魂」とは、深い悲しみや強い感動を表わす言葉だからです。そういえば日本では魂が消えると書いてタマゲルなどとも言いますね。あるいは同一の語源から来ているのかもしれませんが。本当はどうなんだろう、と考えせられて、何となく余韻がある、そんな作品です。

「詩というものは、どこかワケがわからんところがあるのが良いですねえ。散文みたいにあんまりハッキリ分かる詩は飽きられます。どうなんだろう?と答えのわからない事を一千年も人に考えさせる、これは詩の魔力ですね」と植田先生。

「詩の魔力!」植田先生の言葉にはいつも、ハッとさせられます。そうか、そうだなあ、芸術っていうのは鑑賞する人を異空間に連れていきながら、自由に空想させ思考させる一種の魔力なのだなあ、と改めて感じました。

それにしても、予定外の事が起きてムシャクシャした時に「こうなったら酒でもくらってやれ」と思うのは千年前も変わらぬ人の心理。妙に親しみを感じます。

杜牧は満50歳になる前に亡くなりましたが、文学者として非常に多くの作品を残しました。平明で分かりやすい表現、豪放な性格、女性にモテ、芸者遊びも楽しんだ多面性のある人だったようです。同時代の李商隠と共に小杜、小李と並び称されました。これは、一時代前の巨匠、杜甫と李白を老杜、老李と呼ぶのに対して付けられたニックネームです。

ちなみに杏花村、と言えば「酒どころ」というイメージが出来上がったのも、この詩からだそうです。中国全土に杏花村という地名があるそうですが、最も有名なのは汾酒(フェンジュウ)の故郷、山西省太原。しかし、この詩に読まれた杏の花咲く酒どころは、恐らく杜牧が左遷された江南の地だったよう

qīng míng
清明

dù mù
杜牧

qīng míng shí jié yǔ fēn fēn, 清明の時節雨紛紛

lù shàng xíng rén yù duàn hún 路上行人魂を断たんと欲す

jiè wèn jiǔ jiā hé chù yǒu 借問す酒家は何処にか有ると

mù tóng yáo zhǐ xìng huā cūn 牧童遙かに指さす杏花の村

です。しかも、この時代はまだ汾酒のような度数の高い蒸留酒は作られていなかったようです。

山西省の杏花村はこの詩を掲げて町興しのシンボルにしているようですが、杜牧がこの詩を読んだ時代よりも後に出来た村とお酒のようです。

前置きが長くなりましたが、原詩は上です。

訳のわからん詩なので、訳のわからん訳が良いんじゃないかと、先生が付けられた訳はこちらです。これがまた、語呂が良く、暗唱したいような名訳です。

清明節に雨しとど

道ゆく人は気もそぞろ

酒屋はどこじゃと尋ねたら

牧童の遙か指さす杏花村

さて、二首目は『唐詩選』に納められている王昌齡の詩です。王昌齡は盛唐期の詩人で、李白とも親交が深かった人です。科挙に合格し、一応エリートコースに乗ったものの、官僚の世界では評判が悪く、左遷させられます。

官僚を務めるには心が純粋過ぎたし、この人もま

fú róng lóu sòng xīn jiàn
芙蓉楼送辛漸

wáng chāng líng
王昌齡

hán yǔ lián jiāng yè rù wú 寒雨江に連なりて夜呉に入る

píng míng sòng kè chǔ shān gū 平明客を送りて楚山孤なり

luò yáng qīn yǒu rú xiāng wèn 洛陽の親友如し相問わば

yī piàn bīng xīn zài yù hú 一片の氷心玉壺に在り

た遊び人だったようで、流した浮名は少なくなかったようです。「登鸛雀樓」の詩で有名な王之涣と共に、女性にモテモテの流行作詞家だったようです。さて、この詩は鎮江にあったと言われる芙蓉楼で、同じく左遷されていた仲間の辛漸が洛陽に帰るのを送ったときの送別の詩です。

「良い詩人ほど性格が変わっていて、ある意味純粋で扱い難い。だから左遷させられる

人が多いんですよ。左遷させられた方が全国の風土人情に触れて、良い作品が出来るんですよ。頭で考えた詩ではなくて、実体験の重みが加わっているからね。杜牧、白居易も左遷組。蘇東坡なんかは一生左遷だったね。」と植田先生。

この詩のハイライトは何と言っても最後の一句、一片の氷心玉壺に在り。

「もし、故郷の親友達が私のことを尋ねたらなら、氷のように澄み切った心が玉の壺に入っている、と答えてくれ」と言っているのです。世間では色々言われているが、私は変わることなく清い心でいるのだ、という意味だそうです。この一句は非常に有名で、中国の現代文学者である謝冰心のペンネームもここから来たようです。

この詩も、平仄と押韻何れもピッタリで、芸者遊びで鍛えた？音感の良い芸術家の才能がにじみ出ているような秀逸な作品です。

芙蓉楼で辛漸を見送る。

冷たい雨が揚子江に降り注ぎ、川の水と連なって、夜、呉の地方へと流れていく注。

早朝、北へ旅立つ友人を見送れば、楚の山々が取り残されたように寂しげだ。

洛陽の親友が、もしも私のことを訪ねたならば、氷のように清らかな心が、玉の壺に入っているようなものと答えて欲しい。

■注：多くの解説書では、「呉に入る」の主語は作者自身と解しているが、「寒雨」を主語とみなす解釈もある。これは雨を半ば擬人化した表現で、こちらの方が原意にかなっているように思われる。